

FLORA KANAGAWA

Dec. 20. 2008 No.67

神奈川県植物誌調査会ニュース第 67 号

〒 250-0031 小田原市入生田 499 神奈川県立生命の星・地球博物館内
神奈川県植物誌調査会

TEL 0465-21-1515 ・ FAX 0465-23-8846

<http://nh.kanagawa-museum.jp/~kana-syoku/>

e-mail kana-syoku@nh.kanagawa-museum.jp



トウゴクシソバツナミ (相模原市津久井町鳥屋 2008 年 6 月 28
日 久江信雄 撮影)。本文 820 頁を参照して下さい。

目次

山口勇一：三増のヒメフタバラン	820
久江信雄：丹沢三峰にトウゴクシソバツナミ	820
足立直義：横浜市でウスベニニガナ	820
奥津 均：イワミツバの逸出	821
勝山輝男：神奈川県産のシマツユクサが急増中	822
浜口哲一：横浜駅西口のイワヒメワラビ	823
田中徳久：草刈に遭ったマネキグサ	823
林 辰雄：柏尾川のみズキンバイの保全・復元計画	823
田中徳久・勝山輝男：次の『神奈川県植物誌』に向けて	824
事務局：2008 年度総会の報告	825
編集後記	826

三増のヒメフタバラン

(山口勇一)

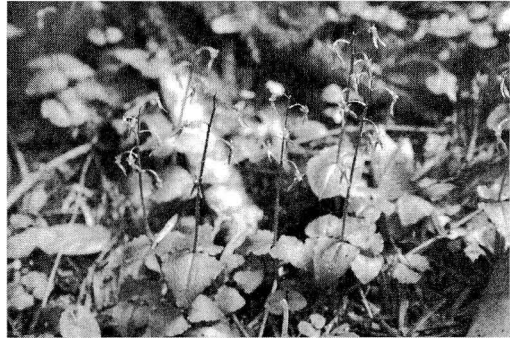
4月10日、三増峠近くの林道から逸れ、杉林の途切れたやや明るい疎林に入っていくと、2つの葉が対になった小さな植物がかなりの密度で群落を作っているのに出会った。初めて目にする植物であり、ただならぬ発見と胸をときめかせながら写真を撮り、その特徴を観察しながら、帰宅後に行う種名の検索に期待を抱いた。

帰宅後、写真と見比べつつの検討の結果、この植物はヒメフタバラン *Listera japonica* Blume であった。高さ10cm程で、2つの葉が地表近くで対になっている和名の通りのかわいらしいラン科植物である。花や花茎が茶色を帯びたものと、葉も茎も緑色でやや大型のミドリヒメフタバラン form. *viridis* Hirayama が混生していた。地下茎を通して幼植物を生じ、まとまった群落が形成されているようである。株数は幼植物まで数えると500株以上が散見された。

ヒメフタバランは、『神奈川県植物誌 2001』では絶滅種とされ、1953年の箱根産の標本が引

用されている。その後、『神奈川県レッドデータ生物調査報告書 2006』でも絶滅種とされたが、勝山(2006, FLORA KANAGAWA (62): 770-771)により、2006年、箱根での自生が明らかになり、「絶滅種」だったものが再発見されたことが報告されている。

『津久井城山及び三増の植物』(東京薬科大学, 1983)には当地域での採集記録があることから、その後もひっそりと息づいていた植物が、20数年ぶりの発見となったと思われる。



ヒメフタバラン (愛甲郡愛川町三増峠 2008年4月10日 山口勇一撮影)。

丹沢三峰にトウゴクシソバツナミ

(久江信雄)

早戸川から丹沢三峰へ突き上げている尾根上に、長らく消息不明種になっていたトウゴクシソバツナミ *Scutellaria abbreviata* H.Hara を記録したので報告する。

トウゴクシソバツナミは、『神奈川県植物誌』(1958)には大山等の、林ほか(1961, 丹沢山塊の植物調査報告)には大山、札掛の記録があったが、その後の調査では見つからず、『神植誌 1988』、『神奈川県レッドデータ生物調査報告書 1995』、『丹沢大山自然環境総合調査報告書』、『丹沢山地動植物目録 1997』、『神植誌 2001』、『神奈川県レッドデータ生物調査報告書 2006』、『丹沢大山動植物目録 2007』を通して、証拠となる標本や写真が確認できないままになっていた。

2008年6月28日、相模原植物調査会の宮崎、三樹と私は、早戸川源流の枝沢を詰めて、丹沢三峰稜線を目指した。途中、標高約900mの尾根に出た所で慣れないツツナミソウ属の花に目が止まった。茎長は非常に短く、葉は光沢

がなく、やや厚みがあり、毛が多く、茎の節間は短く、茎、葉柄、花柄には開出毛が多く、一見して、丹沢では初認のツツナミソウ属の植物と分かった。しかし、鹿などによる食圧のために矮小化した可能性も考えられた。帰宅後、数種類の図鑑と『神植誌 2001』に当たった結果、その特徴からトウゴクシソバツナミと同定した(表紙写真)。なお、生命の星・地球博物館の勝山学芸員に写真を送って見ていただき、ホナガタツツナミソウ、シソバツツナミ、イガタツツナミなど近縁種との区別が容易ではないため、標本を検討して確認していただいた。

標本：相模原市津久井町鳥屋 久江信雄
2008.7.6 KPM-NA0132910.

横浜市でウスベニニガナ

(足立直義)

2007年11月初旬、横浜市瀬谷区本郷在住の大島恵美氏から、「自宅隣接の畑の道端で、ウスベニニガナと思われる植物が1株あったが、その後掘り取られてしまった」との話を聞き、確



ベニバナニガナ。左：野外での様子（横浜市瀬谷区本郷 2007 年 12 月 26 日 足立直義撮影）、右：室内で開花した花（2008 年 2 月 11 日 足立直義撮影）。

かめる術を失っていたところ、本郷 3 丁目の林床に同じものがあつた、との事で、2007 年 12 月 12 日、現地へ行き、ウスベニニガナ *Emilia sonchifolia* (L.) DC であることを確認した。

この株も 1 株で、上部を一度刈られているらしく、茎、葉は地面を這い、蕾のある茎を 2 本持ち上げてはいたが、良い状態ではなかった。開

花を期待してそのままその場所に置いた。

12 月も半ば過ぎ、気温も下がり、枯れはしないかと、暮れの 26 日、再度訪れた所、蕾は寒さで枯れ、植物体全体も傷み、枯死する恐れが見られたため、鉢に移植し、自宅で育てることとした。

日当りのよい窓辺に置いたところ、元気を取り戻し、新しい花芽をつけ、40cm にも成長し、2008 年 1 月下旬より開花（直径 1.1cm）を始めた。

『神植誌 2001』によれば、神奈川県に帰化が報じられたことがあるが、確実な証拠はない（大谷 1959. 横須賀博研報（4）23）。

高橋秀男氏のご教示によれば、古くは発見された記録があるようだが、証拠標本もなく、確実な報告とは言えず、その後も見つかっていないとのことなので、ここに報告する。なお、標本は横浜市こども植物園に収める。

イワミツバの逸出

（奥津 均）

鎌倉市佐助にある銭洗弁天近くの空き地に、見慣れぬ大きめのセリ科の植物が 2～3 年前からあるのに気づいていたが、名前は不明だった。花が咲けば判ると思いそのまま経過していた。2008 年 5 月 29 日、開花を見てイワミツバ *Aegopodium podagraria* L. と判明した。決め手は、ツルカノコソウのように地下茎をひいて増えること、花は傘状の複散形花序をなし、鑑賞用にもなるほど美しい姿（後述するがここが重要）、葉はニンジンのように細くならずカノツメソウのように大きい葉を 3 出、小葉は長めの卵形で先が尖り鋸歯が目立つなどで、判断は楽であった。『神植誌 2001』に、鎌倉で記録があると書かれており、当場所かもしれない。

イワミツバについては、「明治年間に観賞用として入った」と多くの帰化植物図鑑に記載がある。今回の例も、この空き地は昔、大きなお屋敷があり、広い庭が広がり、隣家との境界の垣根の下に、植木屋が暗い空間を明るく見せるために白い花が目立つイワミツバを観賞用に植えたのではないかと、そして、それが現在も生き残ったのではないかとと思う。

花が美しいので古い時代に観賞用として入り、帰化植物の仲間に入った植物を調べると、キク

ニガナ（明治以降）、フランスギク（幕末）、キクイモ（江戸末期）、シヨカツサイ（江戸時代）、ムシトリナデシコ（江戸時代）など多くあり、今回のイワミツバもこの例であろう。

ここに「The Wild Flowers of Britain and Northern Europe 英国と北欧の野生植物の図典」があり、次のように記載がある。

"Ground Elder" *Aegopodium podagraria*. Creeping, patch-forming short / medium perennial. Lvs 1-2-trefoil. Fls white, usually no bracts; June-Aug. Fr egg-shaped, ridged. Shady and waste places, and a tenacious garden weed. Throughout the area.

報文名は「イワミツバの新産地」としたいが、



イワミツバ（鎌倉市佐助 2008 年 5 月 29 日 奥津 均撮影）。

昔日の観賞用の植物がそのまま残り、今日になって帰化植物の仲間としての再発見なので、「イワミツバの逸出」とした。鎌倉から再び分布が広がることがあれば、この場所が「元」となることもあると思う。標本は横須賀市自然博物館に収めた。

標本：鎌倉市佐助 奥津 均 2008.5.29
YCM-V45106

参考文献

Blamey M., Fittet R. & Fitter A., 1974. The Wild Flowers of Britain and Northern Europe. Collins.

長田武正, 1972. 日本帰化植物図鑑. 北隆館.

長田武正, 1976. 原色日本帰化植物図鑑. 保育社.

清水矩宏ほか編著, 2001. 日本帰化植物写真図鑑. 全国農村教育協会.

清水建美編, 2003. 日本の帰化植物. 平凡社.

神奈川県新産のシマツユクサが急増中 (勝山輝男)

2008年9月15日、伊勢原市の酒井道子さんより、伊勢原市上平間にシマツユクサらしい植物があると、手紙と写真が送られてきた。水田や畑の中にある祠の周辺に群生していたそうである。青い3枚の花弁、先が尖った細長い苞より、明らかにシマツユクサ *Commelina diffusa* Burm.f. とわかる。神奈川県では初記録なので標本を作成していただいた。

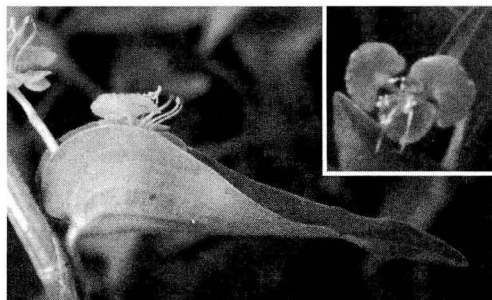
神奈川県新産であるので、次の FLORA KANAGAWA で紹介しようと考えてしていたところ、10月23日、茅ヶ崎市の三輪徳子さんから、「茅ヶ崎市下寺尾、小出川左岸、稲刈り後の水田の畦で小さな花をつけたツユクサの仲間を見つけました・・・。3年ほど前までは見かけませんでした・・・。ツユクサとの主な相違は、花の径が約1cmと小さいこと、色は淡い青が多く花弁が3枚のこと、ツユクサは花粉を出さない雄しべ3本の花糸が短いのに対し、こちらの花糸は長いこと、葉は4～5cmと短く、全体に小形・・・」との細かい形態の記述も伴ったメールを頂いた。添付された写真はやや引いて撮影されたものであったが、伊勢原のシマツユクサを見ていたので、すぐにそれと判断できた。

三輪さんによると、この場所は2003年に花暦調査をし、2004年から2005年にかけて茅ヶ崎

市が行った自然環境評価マップ調査の担当地区でもあったので度々訪れていたが、その際にはまったく気付かなかったというので、シマツユクサは最近になって侵入してきたものと思われる。また、三輪さんからは、小出川に沿って行谷の上流になる芹沢白久保、芹沢広町にも田の畦や草丈の低い休耕田には同じように群生が見られたこと、小出川中流域右岸の寒川町大蔵と藤沢市打戻の一部でも、畦のような環境には普通に出現していたとの報告をいただいた。

シマツユクサは調査メッシュではISE-2(上平間)、CH-1(下寺尾北方、行谷広町、芹沢白久保、芹沢広町)、SAM(大蔵)、FU-1(打戻)の4調査メッシュ、3次メッシュでは5メッシュに記録されたことになる。どのような経緯で運ばれてきたのかは不明であるが、これまでに分布していなかった場所に急速に分布を広げている可能性がある。

なお、シマツユクサは、熱帯に広く分布するツユクサ属の植物で、日本では鹿児島、屋久島、種子島、奄美、沖縄に以前から分布が知られていたが、最近になって大阪府(北河内自然愛好会, 2004. 北河内植物目録)や愛知県(小林元男, 2004. 宝飯の植物)に帰化が報告されていた。インターネットでシマツユクサを検索してみると、埼玉県北本市で2001年、志木市で2005年、徳島県で2005年に記録されていた。また、帰化植物メーリングリストでは静岡市で発見され(西口紀雄, 2006. Naturplant: 2850)、その後増加していること(西口紀雄, 2008. Naturplant: 3736)、熊本県(森田弘彦, 2006. Naturplant: 2853)と千葉県(大場達之, 2006. Naturplant: 2857)で発見されていることが報告されていた。これらの記録や報告から判断すると2001年以後、日本各地で急速に分布が拡大していることが読み取れる。



シマツユクサ (伊勢原市上平間 2008年9月9日 酒井道子撮影)。

標本：伊勢原市上平間 酒井道子 2008.9.24
KPM-NA0133017; 茅ヶ崎市行谷広町 三輪徳
子 2008.10.19 KPM-NA0133019 ほか.

横浜駅西口のイワヒメワラビ

(浜口哲一)

横浜駅西口の高島屋前のグリーンベルトに背の高いシダが茂っているのに気づいたのは、2008年5月20日のことだった。ワラビでも出てきたのかと近づいてみると、それはちょっと意外なことに毛むくじらのイワヒメワラビ *Hypolepis punctata* (Thunb.) Mett. ex Kuhn で、少なくとも20数株がまとまって葉を伸ばしていた。

10月3日に再びそこを通りかかったところ、イワヒメワラビは健在で、斑入りのヤブランが咲いている奥に、すこぶる元気に茂っていた。高島屋の北側で、おそらくあまり日があたらないことが、生育に好条件を作り出しているように思えた。植栽された植物について来たものだろうが、こうして市街地でも夏を越せることが分かったのは嬉しいことであった。



イワヒメワラビ (横浜市西区高島町寸沢嵐 2008年10月3日 浜口哲一撮影).

草刈に遭ったマネキグサ

(田中徳久)

2008年9月27日、火曜会(横須賀方面を本拠とする植物観察グループ)の方々に横須賀市のマネキグサの生育地を案内いただいた。個体数が多かったため標本を採集したが、博物館に戻り、気づいたことがあるので、簡単であるが、報告する。

①草刈のため、主となるシュートの先端がなく、



マネキグサ。左：走出枝の先に新しい株の葉が開く (KPM-NA0161241)；右：主となるシュートが切断され、その下部から腋芽が成長し、付根から発根 (⇄部は採集時にはくっついていて；KPM-NA0161242)。

腋芽が伸び、花を付けているものが多かった(現地で良い被写体がなく気付いた)。

②走出枝を出し、新しい株を作る(左図)。

③主となるシュートが切断されると、腋芽が伸びるが、その付け根からも発根し、新しい株となる(右図)。図に示したものは、採集時には親株に付いていたが、標本作成中、簡単に脱落してしまった。接地するとこのように発根し、新しい株となるのか、主シュートが失われると発根し、自然に脱落して新しい株となるのかは不明である。

なお、今回の採集地は、1992年に勝山輝男氏が採集した標本(KPM-NA0100305)の産地と同じと思われ、3次メッシュは異なるが、同じ谷戸で採集されたと思われる標本もいくつかある。

柏尾川のみズキンバイの保全・復元計画

(林 辰雄)

1996年に「柏尾川のみズキンバイ多産」と題して、FLORA KANAGAWA No.42に報告しましたが、それから11年が経過した現在、当時何ヶ所にもわたって見られたみズキンバイは全く見られなくなりました。今、わずかでも見られるのは、JR戸塚駅近くの吉倉橋の上流の土砂が堆積して島状になったところだけです。

これは柏尾川の洪水対策として、河床の掘り下げ工事が行われたためで、この工事に先立って、大量のみズキンバイは金井遊水池に仮移植して、保護されました。1m四方の植え柵560個の中のみズキンバイは、散策路から見る限り、元気に生育しているようです。工事を請け負っている造園会社に聞くと、35柵ほどが生育不良とのこと。工事は2006年度に大船側の鷹匠橋から上倉田団



金井遊水池にか仮植されたミズキンバイ（横浜市栄区
金井町 2007 年 11 月 23 日 林 辰雄 撮影）。

地近くの高島橋が完了し、2007 年度以降はさらに上流の柏尾橋まで、併せて 6,200m の距離にわたり、柏尾川大橋から吉田大橋までがミズキンバイの復元範囲で、この間に 4 ヶ所の大規模な復元区域を造り、差し当たっては 2009 年 3 月に試験的な定植を行い、2 年後には完成の予定だそうです。

なお、タコノアシも保護しては、と聞いたら、仮植えの段階でうまくいかなかったということでした。

次の『神奈川県植物誌』に向けて

(田中徳久・勝山輝男)

次頁からの役員会・総会の報告にもありますが、そろそろ次の『植物誌』に向けてのロードマップを作成し、計画的に活動しては、との発言が浜口哲一さんからあり、その旨「推めていこう」と、承認が得られました。

『神植誌 2001』の刊行からすでに 7 年ほどが経過しました。『神植誌 2001』は『神植誌 1988』刊行から 13 年後に出ましたので、同じ間隔で次の植物誌を出すならば、2014 年になります。『神植誌 2001』のための調査を本格的に再開したのは 1995 年で、丸 6 年を費やしました。次の植物誌刊行を 2014 年とすると、そろそろ始めなければ間に合いません。とは言え、そんな提案がなされ、総会・役員会で承認され半年以上が過ぎましたが、事務局の力不足もあり、具体的な動きはまだ起こしていません。そこで、それを補うつもりで、役員会・総会で出た意見も含め、次の『神奈川県植物誌』へ向けて、現状の整理、今後解決すべき問題点を思いつまま書きあげてみました。

『神植誌 2001』の残部

生命の星・地球博物館には、450 部ほどの在庫があります。『神植誌 2001』の調査の再開は、『神植誌 1988』が完売し、希望者のニーズに応えられなくなった、というタイミングも大きかったように思います。『神植誌 2001』は、年に 100 部ほどが売れているので、完売まで 4～5 年は掛かります。広く宣伝し、残部を減らすか、何か方策を考える必要があるようにも思いますが、このままの販売部数でいくと、次の植物誌刊行の直前に完売となるので、それでも良いのかもしれませんが。

正誤表や補遺の作成

2002 年 2 月 1 日に正誤表を出し、『神植誌 2001』の増刷時には軽微な訂正は反映させました。しかし、その後、軽微なものも含め、訂正すべき点、新たな知見により改訂すべき点などがかなり出ています。これを一度整理する必要もあると考えられます。『神植誌 2001』刊行後の神奈川県新産種や新しい知見は随時 FLORA KANAGAWA で公表してきました。FLORA KANAGAWA はこの間に No.52 から No.67 まで 16 号、事務連絡も含めれていますが、通算して 216 ページ分が出されています。

次の『植物誌』の基本的な考え方

『神植誌 2001』の刊行に向かって動き始めた当初、それは『神植誌 1988』の改訂版のような位置づけでした。その調査、作業を進めるうち、ご承知のように『神植誌 2001』は、“改訂新版”のような植物誌になりました。『神植誌 2001』は『神植誌 1988』の経験を生かし、その反省のもとに作成したので、内容的にはこれ以上は望めない水準に達している、との声も聞きます。次の植物誌は、必要な部分の改訂と分布図の更新が最低ラインとすると、新たに作り上げる（変えるべき）余地がどこまで出て、何か新しいアイデアがあるでしょうか。例えば、『神植誌 2001』では、一部に取り入れられた絵解き検索ですが、実際にこれを全編に導入することは可能でしょうか。

実際の植物相調査とブロックの役割

『神植誌 2001』では、拠点が新たとなったブロック以外は、『神植誌 1988』の補充調査という位置づけで、その時点では、全調査メッシュでの記録種すべての標本を採り直すことは行いませんでした。また、それを目指したブロックにおい

でも、『神植誌 1988』と同程度の密度、精度で調査が行われたかは微妙です。証拠標本を保管する各ブロックの拠点となっている博物館等の収蔵スペースにも限界があります。博物館の標本管理者としては、新産種や新しい産地の標本は必要ですが、普通種や同じ産地の標本はこれ以上収蔵したくない、と言うのも本音です。

2回の植物誌調査を通じて、調査会会員の植物を見る目は素晴らしく向上したので、すべての種について同定の確認、証拠としての標本を作成する必要はないかもしれません。しかし、『神植誌 1988』の記述のために標本をチェックして痛感したのですが、たくさんの標本が集まったことによって、異質のものが含まれていることに気付くこともあります。新産種だけの標本収集を目的とすると、その機会が失われる可能性もあります。長期間継続する植物相のモニタリングとして、どの程度の標本作製が必要か、難しいところです。

電子版植物誌

次の植物誌はもはや書籍として出版する必要

はないかもしれません。インターネットでリアルタイムに配信することも考えられます。解説は『神植誌 2001』に必要な改訂を加える程度で十分で、分布図は新しい標本データが反映されたものを随時配信することになります。新産種はその都度、追加することも可能です。植物のカラー画像や証拠標本の画像をリンクすることも可能でしょう。検索方法もいろいろなものを組み合わせることができます。もちろん、いろいろと検討すべき課題は多いですが、次の『神奈川県植物誌』、いったいどんなものになるのでしょうか…。

なお、この記事は、事務局として書いたものを掲載すべきかとも思いましたが、いろいろな考えもあるので、個人名で書かせていただきました。次号以降、いろいろな方々に考えをお書きいただき、その総体として、次の植物誌への動きに繋がればいいかな、とも思っています。ぜひ、原稿をお寄せ下さい。また、原稿ではなくても、この記事への感想や次の植物誌への考えでも、どしどし事務局へお寄せ下さい。

2008 年度総会の報告

(事務局)

● 2006 年度 事業報告

● 2006 年度 決算報告・監査報告

●各ブロックの活動報告

● 2008 年度 運営体制

● 2008 年度 予算

● 2008 年度 事業計画

編集後記

今年度最初の FLORA KANAGAWA をお届けします。予定では、総会終了後、夏前には発行しようと考えていましたが、事務局の都合と原稿の不足で、この時期となってしまいました。原稿さえ集まれば、すぐ次号を発行しますので、今シーズンの成果、ぜひ、ご投稿ください。…と書くと、事務局の都合などと、言い訳は出来なくなりますが。

なお、今号から会への連絡用のアドレスを新しくし、最後の頁にも連絡先等を入れました。

(田中徳久)

神奈川県植物誌調査会

〒 250-0031 小田原市入生田 499
神奈川県立生命の星・地球博物館内
TEL 0465-21-1515 ・ FAX 0465-23-8846
e-mail kana-syoku@nh.kanagawa-museum.jp
郵便振替 00230-5-10195
加入者名 神奈川県植物誌調査会
年会費 2,000 円